

## 中国・四国支部

支部長 山口龍彦

### 【第13回日本死の臨床研究会中国・四国支部研究会（愛媛県大会）の予告】

大会長：中橋 恒（医療法人聖愛会 松山ベテル病院 院長）

会期：2012年6月16日（土）

会場：ひめぎんホール（愛媛県民文化会館）中ホール

テーマ：看取り 看取られ 人は生きてゆく

記念講演：いのちのバトンタッチ -映画「おくりびと」に寄せて-

講師：青木新門氏

### 【大会長よりのご案内】

昨年3月11日に発生した東北大震災は復興まなならぬ現実の厳しさもさる事ながら、2万人近くの多くの方々の旅立ちという残された者にとって最愛の人を突然失う悲嘆の傷を残す大きな体験を与える出来事でした。「人を思いやる心」、「命の大切さ」、「生きる事の意味」など日本人の一人一人がそれぞれの立場で一番大切なものは何かを問いかけられた出来事でもありました。

今回の愛媛県大会は『看取り 看取られ 人は生きて行く』をテーマと致します。昨年の大震災は、突然の永遠の別れが残された家族にどれほどの喪失感を与えたかを物語る大きな出来事ではありましたが、ホスピスの現場でも愛する家族を残し一人旅立つ患者と、愛する人との永遠の別れで悲嘆にくれる残された家族との間に多くのドラマが繰り広げられています。決して避けることのできない『死』という永遠の別れに少しでも悔いを残さぬ別れにするために、看取られる者から看取る者への「命のバトン」が必要なのではないかとの思いをさらに強くした次第です。

看取られる者は看取る者へ何らかの『モノ』を残します。残そうとする思いは旅立つ者の『希望』となり、看取る者は残された『モノ』を明日を生きる『希望』という心の拠所に変えて残された人生を歩んで行きます。人は自分の人生の中で愛する人を看取り、そして愛する人に看取られ一生を終えます。看取る時、看取られる時、「命のバトン」がしっかり渡せたならば、「命」の永遠性に繋がるのではないかと思えてなりません。

愛媛県大会の記念講演として、映画『おくりびと』の制作モチーフになった『納棺夫日記』の著者である青木新門氏をお迎えし、“いのちのバトンタッチ-映画「おくりびと」に寄せて-”のテーマでお話を頂く事にしています。

皆様と松山の地で『看取り』について改めて考えてみたいと思います。多くの皆様とお会いできることを楽しみにしております。

当番世話人 中橋 恒

追記 他支部からの参加も大歓迎です。

### 【中国・四国支部入会申し込み、愛媛県大会お問い合わせは下記の時事務局まで】

〒781-8121 高知市葛島1-9-50 高知厚生病院

TEL 088-882-6205（内線250） FAX 088-883-1655

担当：明神